

子どもの考え方を伸ばすための絵画製作



林 健 造

一、やりがいと生きがい

子どもたちが空箱で何かを作っている。やがて「できたよ！すごいんだぞ」と叫ぶ。ようやくロボットが作れたらしい。その子の嬉しそうな顔、輝やいている眼。

こんな時、子どもたちは、本当にやりがいを感じたのである。

やりがいがあるということは生きがいがあるということである。子どもであろうとおとなであろうと、生きがいを感じないとしたら、それは病的である。そうなつたら、喜んでかけまわつてゐる犬よりむしろあわれである。

生きがいのある仕事といった場合、これは型通りやるとか、いわれた通りやるといった場合には薄い。したがつてこれはむし

ろ、何とかを新たに創りだすこと、つまり創造することに結びつくはずである。

創造ということは、「本来バラバラな異質のものを、意味のあるように結びつけ、秩序づけること」である。

つまりキャラメルの空箱と牛乳のふたという異質のバラバラなものをロボットを作ろうという意味づけのもとに作りあげて秩序づけるのだというわけである。

創造的な行為には、少なくとも三つの条件があるといふ。

- 1、自發的であること
- 2、お手本がないこと
- 3、遊びでないこと

つまりこれは独創的でしかも切実な問題として、ぶつかるとき

に創造的な行為が發揮できるということをいっている。

また、絵画製作などの創造的行為を通しての大きなねらいは、

ものとのものとの心の通じあいということである。

このことは、人間疎外や人間革命などという近代の大きな病い、人間同志が単に利害打算だけでつきあい、無関心という孤立状態にあるだけに、その心の通じあいを学びることは大きな意味がある。

K・H・リードが人間疎外の解決策として、直接、手を動かしてかいたり作ったりし、自らの感覚で感じとる美術教育をさかんにすることだと謳っているのはけだししい眼というべきであろう。

二、絵画製作における考えるの意味

絵画製作の活動を通しての子どもの考え方を問題にする場合、考えるという意味について考えてみなければなるまい。

これは今まで述べてきた、生きがいや、自発性と結びついたもの、いわば創造的思考（生産的思考）の方向を伸ばすのだということが前提になろう。

問題は、次の心象表現の場合に大きい。

一般に絵をかくのに考るなどということはじやまなことではないか。考るなどといった場合は、理科とか算数とかにはふさわしいが絵の場合には感づるという方が大切なことであるといわれていることの方が多い。

ところで考るということの意味を考えてみよう。

記憶のはたらきで、頭の中にたくわえられた材料を、意識の中でいろいろに配合し、新しい組合せをつくる働きが思考である。この定義は、きわめて創造の意味と似ている。

考るを分けると、連想と判断と推理とに分けられる。

フロイトのような自由連想、これは絵をかく場合もよく表われ

紙でかぶれるお面を作るというような適応表現といわれる領域があつて、その各々の領域で考えたが少し違うであろう。

たとえば、後者の適応表現においては、まつたく考るということそのものが生命みたいである。なぜならば、今画用紙をつかつて、『履けるスリッパ』を作ろうということで、子どもたちが作ろうとすれば、自分の足型をとり、それにあわせて紙を切り、こんどは、どうしたらぬげないよう工夫したらよいだらうかを考えるということになろう。つまり、適応表現においては、より目的的な方向に接近させることが考ることの意味で、こにはあまり問題がない。

る。推理では想像力が大きな役割りを果す。かくて新しい構成を

もつた生産的思考へと発展していくのであるが、いかなる問題の

解決も、推理力と想像力の結びつきが必要になってくる。これ

は、全体としてとらえようとする見通しの能力の土台になるから

である。

したがつて心象表現の場合の考へるとは、一つは見通しをつけ

ることであり、もう一つは、たしかめのためにということ、本命

であろう。

私はよく、しっかり見て描きなさいといつて鳥を見せたり、花

をみせたりして描かせることがある。

私なども少年時代、バケツをよく見て描けといわれて、眼玉を

大きくしてみていたら、眼がいたくなつた経験があるが、これなどは、よく知覚させ次に考えさせるというステップをふませようとしたのだろうが、正しくないのでなかろうか。

われわれは、物事をありのままに見るなどということはできず、むしろ何を考えているかによって見方が変つてくるのである。

腹がすいていれば、電車のつりかわでさえパンに見えてくる。

次に心象と適応とを問わず、考へる場にはどんな場面があるだろうか。

1、発想の場

2、計画の場

3、材料選択の場

4、構成の場

5、表現法の工夫の場

6、仕上の場

7、評価・鑑賞の場

8、使用の場

これらの各場面で考へるという活動が行なわれている。

何を描こう、どうかくかな、何を使って、ここを大きくかいて、あれはどう描くのかな、これでいい、あんまりうまくいかなかつたな、ということになる。

要は、絵の場合など感ずることを主にしていて、考へることの分野も大切であったのに、この方はあまりすじ道をたてて考へてこなかつた点が問題になるというわけである。

三、考へ方を伸ばす具体策

1、見せること

児童には、見せないで、好きなものを好きなように描かせていたというのが今日までの絵の教育の傾向であった。

このことは、子どもの自然発生的なものを大事にし、また子どもの精神をリラックスするために確かに一応の成功はおさめ

た。

しかし、ただ自由にでは、魚をかいても、花をかいても、すぐにはステレオタイプ（型）におちこんでしまうので、自由にかかせることを強調している教師でも、实物をしばしば見せていたものである。

事実、お友だちの顔をかかせても、よく鼻のことに注意をむけてやると、もう一本棒の鼻はかかなくなる。

みせるといつても、かつて大正時代にやったように、まったく子どもの心理と結びつきのない、バケツをもつてきたり、巻物をかかせたりすることではない。4、5才の子どもがバケツに感動しちゃったなどということはないのである。

2、題材の問題

なにしろ日本の絵画製作のカリキュラムは、一月からの年中行事を追いかけていればできてしまうといわれている。

二月初午、三月おひなさまという具合である。

このテーマで子どもに何を考えさせ、何の力を伸ばしていくかという出発からではなく、三月はひなまつりがあるから、お人形でも作らせようというのである。したがって4才児ならこの程度の人形でいいだろうという立前だから、絵の方でいうおとなとの水割りと少しもかわらないのである。これは子どもの独自性を認めていない、強くいえばばかにしたやり方ですらある。

アメリカのロウエンフェルド博士がこころみたものや、東ドイツの題材は、それよりも遙かに進んでいて参考になる。

たとえばロウエンフェルドは、一文字の口しかかいていない子どもたちに、固いお菓子を与えて、よくかませてから、『さあお菓子をたべてるところを描こう。』という題を与えたら、みんなこどもは歯のいっぱいある口をかいたという例もおもしろいし、彼にはその他、おとした鉛筆をひろう、ナイフとフォークで食事をしている、ブラシで歯をみがくなどのテーマがある。それぞれここで、手に、歯に関心と認識を深めていこうという教育的な計画をもつたテーマである。

大人を描きなさいでは、イメージがつかめないために、抽象的な概念的な人の型を描くようになるのは当然である。

東ドイツでも、基底線の問題や横向きの人を描かすために、おかざんに花を捧げるという題や、基底線を上にあげた絵などをテーマにとっている。

子どもたちの絵が、錯画、図式を通してやがて地面に一本の線をひいて、その上に何でも並べてかくようになる。

ロウエンフェルドは、ものとのとの関係がそろそろ解った時期、社会性のめざめであるといっているが、この基底線は子どもにとつては地面を表わしているのである。
ところが紙の下に線をひくために、ものがたくさんかけず、上

は広い空間としてあいてしまう。いつまでもこのままでは進歩がない。したがって、基底線が山のような波形の場合や川のように両側にある場合や、上方にある場合やなどの刺激を与えて、やることが大切である。そのためには道路の幅を歩かせてみることもよいだろう。

もちろん、基底線の問題には、一体、子どもはそれを線としてとらえているのか、面としてとらえているのかという未解決の問題はあるとしても、いつも同じ向きでいるのを手をこまねいていることでは、少しも学習にはなっていない。

3、機能的な造形を大たんに

次に幼児の適応表現、むしろデザインについて日頃思うのであるが、小さい子どもだからもようをかけようとする考え方は間違っているように思う。

4、5才の子どもにもようといつてもどれだけ解ってくれるだろうか。

「もよう？ ってなあに」というようなものである。

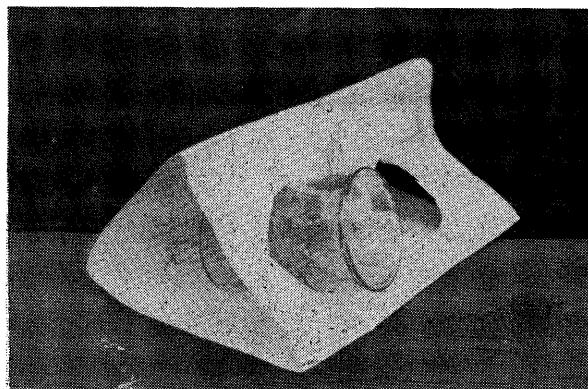
装飾本能はあっても、もようという概念ではない。並んでおもしろいなどいうようなものもある。

のである。

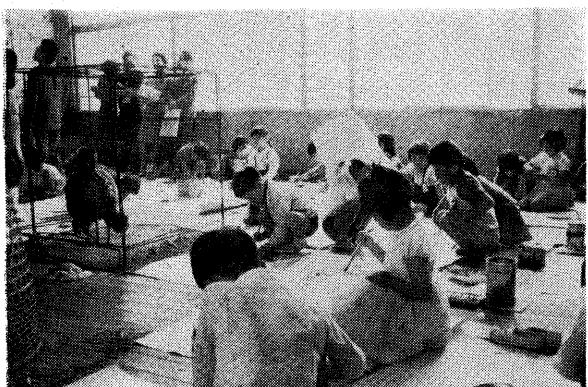
ところが機能的なデザインの芽は、幼児は小さい時から鋭敏である。

赤ん坊でも抱き方がまずいと泣く、障子に指をつこんでは、破いて喜んでいる。それから4・5才頃の子どもの生活をみてみるとほとんどが何かを作つて遊んでいる。それも、どうしてまわらないの、どうしたらはしるかな、どうしたらすぐくなるのといふ

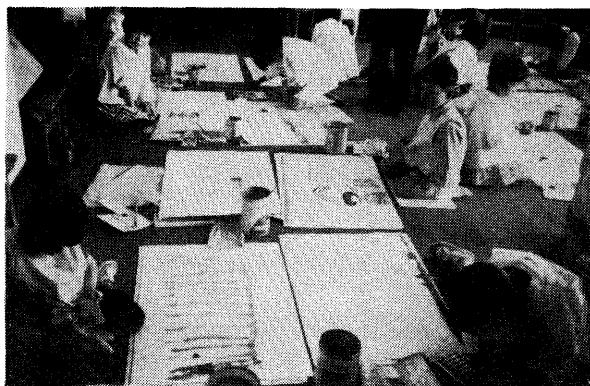
コップをたてる



鳥をみてかく



大きな紙にのびのびと



う、遊び道具の機能についての追究がはげしいのを何どみて
いるのだろう。

だからもようばか
り作らせないで、

“どうしたら動くか
な” “コップがひつ
くりかえらないよう
に作ってよ”などと

いう機能的なデザイ
ンの芽を育てるよう
なテーマでこの大事
な幼年期の造形的な

考える力を伸ばしてやつたらすばらしいと思うのである。

私は、この頃、幼稚園でも、小学生でも、造形教育をすると
いうことはどういう意味があるのかを考えてみたが、結論とし
て、この子たちの祖先がうみそだててきた造形文化に同化し、そ
れを変容させていくという過程を通して生きていく知恵を知らせ
ることなのだと強く信じている。

(お茶の水女子大学・十文字学園女子短大)

あさがおのめ

五才 よこお のりこ

あさがおのめが
はんぶん

でて きた

からだを まげて
てを あげて

はっぱの ちぢれた
キヤベツの

たいそう みたいいな
めを だした――

(東京 春光幼稚園 田中春雄選)